司馬懿(仲達)と倭国女王、『三国志』作者陳寿の関係

---陳寿は倭国を知っていたのか？---

2023/09
横浜歴史研究会
真野信治

司馬懿(仲達)とは？

若年の頃から聡明で、博覧強記・才気煥発で知られ、優秀な人物が揃っていた司馬八達(司馬家八人の兄弟)の中でも最も優れた人物といわれていた。『晋書』「宣帝紀」によると、司馬懿は苛烈な性格であったが感情を隠すのがうまく、内心激しい怒りを抱いている時も表面では穏やかに振る舞ったという。魏国において功績を立て続けて大権を握り、西晋の礎を築いた人物である。西晋が建てられると、廟号を高祖、諡号を宣帝と追号された。『三国志』では司馬宣王と表記されている。

蜀の諸葛亮は五度にわたる北伐を試みたが、その健康状態は芳しくなく、西暦234年ついに五丈原にて陣没する。百日もの持久戦に持ち込んだ魏の将軍司馬懿の作戦勝ちである。諸葛亮なき蜀軍は撤退するしかなく、旗の向きを反対に変え、鼓を鳴らしながら反撃の様子を匂わせる。これをみた魏の武将が「個々が攻めどころ」と言って攻撃を主張するも司馬懿は「なにか仕掛けがある」といって攻めなかったが、このエピソードから『死せる孔明生ける仲達を走らす』との言葉が生まれた。しかし、特に攻撃に出て何かの罠にはまったとする伝承はない。むしろ死去した諸葛亮への敬意を表したのかもしれない。このように、当時魏国の軍事指揮権を有していた司馬懿は『三国志演義』などで語られているイメージとはかけ離れた人物であったことは周知のことである。

時の魏帝曹叡から主に東方の鎮圧を任されていた司馬懿は蜀の脅威がひと段落した後、いよいよ遼東半島の太守であった公孫淵の討伐を本格的に行うこととなる。この司馬懿と公孫淵の戦いの最中に実は邪馬台国からの使いが魏を訪れるわけである。

倭国とは？

古代の中国の諸王朝やその周辺諸国が、当時中国の南東にあった政治勢力、国家を指して用いた呼称。倭国および倭国王の勢力範囲に関しては諸説ある。隋書倭国伝や北史倭国伝では、その国境は東西に五カ月で南北に三カ月とされる。倭人は紀元前二世紀頃から『漢書』地理志などの史料に現れている。七世紀後半に倭国と呼ばれていたヤマト王権は対外的な国号を日本に改めたが『後漢書』以来の倭国との関連は定かでない。中国正史の旧唐書、新唐書の間でも記述に差異があるそうだ。

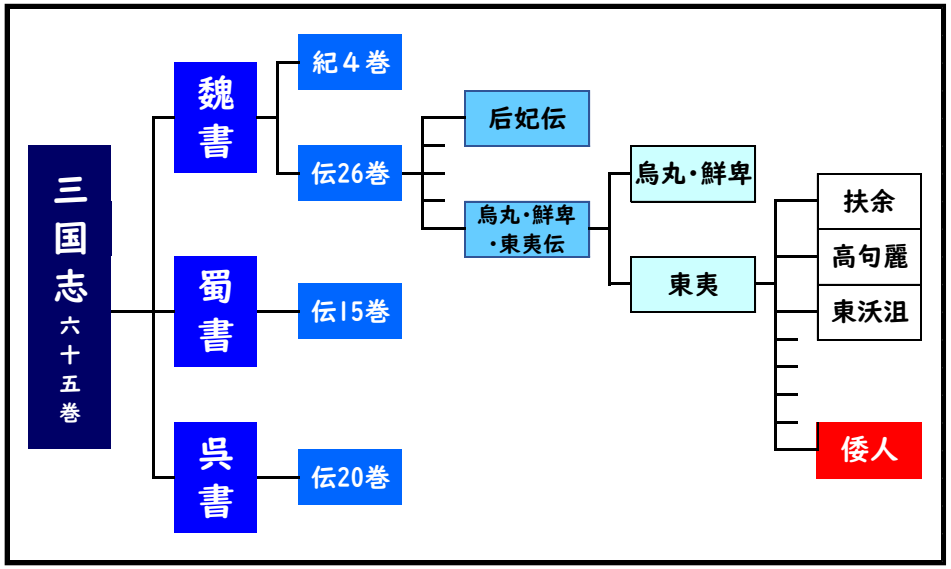
女王卑弥呼の朝貢

景初二年(238)六月、女王卑弥呼が大夫の難升米らを帯方郡に遣わし、魏の皇帝に朝献させてほしいと申し出た。ただ、景初二年はまだ公孫淵征伐の戦闘中なので、おそらく景初三年の誤写と思われる。その証拠に『日本書紀』「神功皇后紀」に「魏志云明帝景初三年六月、倭女王、遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻。太守鄧夏、遣吏將送詣京都也。」と分注している。おそらく公孫淵を滅ぼした司馬懿に忖度し、太守の劉夏が倭国朝貢のお膳立てをし、使者の洛陽への旅路をも世話をしたものと思われる。その結果、魏王は司馬懿の面子を立てて、十二月には卑弥呼に「親魏倭王」の金印と紫綬(しじゅ)、珍宝などが贈られたのである。翌正始元年(240)正月の朝礼には、倭国使者が多くの外国使節の中で首席で参加した。加えて帯方郡太守弓遵は、部下を倭国に派遣、女王には詔書に対する謝恩の手紙をこの帯方郡の使者に託した。

金印

倭人伝が収められている『三国志』とは？

陳寿が著した『三国志』は、魏・呉・蜀の三国の歴史を述べた歴史書である。つまり「魏書」三十巻、「蜀書」十五巻、「呉書」二十巻からなり、とりあえず「正史」として認められている。倭人についての記述は、いわゆる中華思想の観点から、魏書の最終巻である「烏丸・鮮卑・東夷伝」の中の東夷の部分の最後に「倭人伝」として載っている(他には、夫餘・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・韓の伝がある)。魏を正統として取り扱う類書は多いが、陳寿は表題上では三国を対等に扱い、本文もしっかり三つに分立させて編集しているところが特徴と言える。ただしこの史書には重要な特徴が見え隠れしているのだ。つまり、魏が交渉を持った異種族は、烏丸・鮮卑・倭などのいわゆる「東夷」だけではなく、同様に鄯善(楼蘭)・亀慈(クチャ)・于闐(ホータン)・大月氏(クシャン)などの「西戎」諸国の存在もある。しかし、何故かその伝の記述が全くないことである。これは決して偶然ではなく、無視をしてはいけない非常に重要なポイントなのである。



『三国志』の作者陳寿の人物像

陳寿は二三三年に蜀漢で生まれたが、三十一歳の時蜀漢が魏に併合され、その二年後には魏も晋に取って代わられるという言わば激動の時代を生きた人物である。蜀漢滅亡後、不遇をかこっていた陳寿を取り立てたのが張華だと言われている。張華はその博学の才を認められ、司馬昭の書記官からスタートし、当時は国史の編纂から、制度・法令に関することの一切を任されていたという。陳寿はこの張華の下で『三国志』を書き上げ、その出来栄えを非常に評価されたらしい。ただ、苦労して完成させた『三国志』であったが、なかなか日の目を見なかったようだ。そうこうするうちに陳寿は病死してしまうが、死後まもなく張華の働きで「正史」としての公的な地位を獲得することとなる。陳寿の人物的評価として、「究極の空気読めない男」と指摘する研究者もいる。これは、『晋書』に書かれている「私怨により曲筆を行なった」などの陳寿の逸話を信じてのことであろうが、実はこの『晋書』自体が史書としての正確性に問題があり、清代には綿密な考証により、陳寿に対する悪評は事実無根であるとした研究結果も出ている。いずれにしろ、禅譲にて引き継いだ晋の帝権の起源を説き、それが正統であることを証明するための著作行為であったと想定することは十分可能である。このことも非常に重要なポイントである。

俄かには信じられない魏志倭人伝の内容

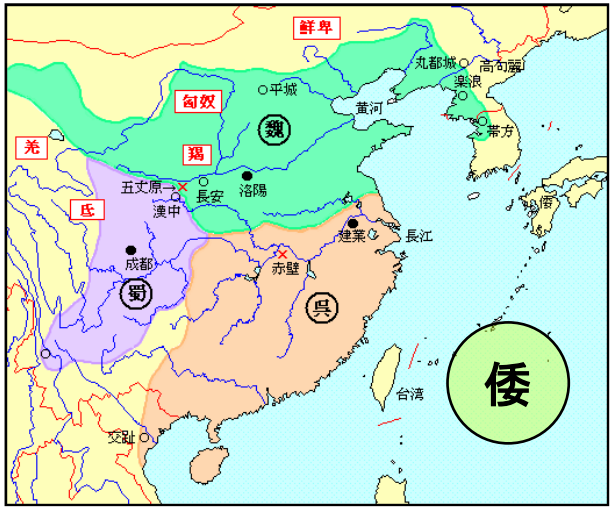
倭人伝には「草木は茂盛して、行くに前人を見」ない太古の自然や、「男子は大小となく、みな黥面文身」しているその風俗や「鬼道につかえ、よく衆を惑わす」とされている女王・卑弥呼の描写がある。いかにも縄文・弥生チックで、思わずその風景を空想し、ひょっとしてそんな世界もありかなと考えてしまう。がしかし、どこまでその時代の実情を伝えているかは大いに疑問である。特に「黥面文身」は非常に気になることであるが、三国時代以前からある言い伝えを参考にし、想像したと見なされなくもない。

中国呉越時代の呉王が長江以南、海岸部の白水郎(あま)の風習を真似て自ら鯨面文身し、出身地の北朝には戻らないことを決意した故事がある。また三国志の中の呉王である孫権もまた鯨面していたとある。つまり中国では鯨面文身は南部の海人族の風習であると認識されてきた。したがって、呉のさらに南東に位置すると思われている倭人も当然鯨面であったであろうという想定の下に記述されている可能性が高い。陳寿が実際に見聞きしたことによる信憑性のある情報を持っていたかは不明である。

女王卑弥呼の記述

また、女王卑弥呼に対する「鬼道につかえ・・・」に続き、婢千人を侍らせ「宮室」、「楼観」、「城柵」に囲まれた中で、“姿を見せない王”として統治したとの描写がある。ところが、『北史』西域伝女国条に「代々女性が王となり、九層の楼に居住し女数百人を侍らした」とあり、『旧唐書』南蛮西南蛮伝にも同様に「九層の重屋に女王が居し、女数百人を侍らす」との描写がある。これを見ると、**どうも女王に関しては「高層建築に住み多数の女性を近侍させ政治を行う」というテンプレート**があらかじめ出来上がっているように思えてならず、さらに言えば伝承と言うよりも、あくまでも筆者の想像の範疇なのかもしれない。したがって、卑弥呼に関してもこの描写がどこまでが卑弥呼本人の固有情報なのか、単なる女王国に関する一般描写なのか、安易に判断は出来ない。一方で、帯方郡から邪馬台国に至る道筋について、その距離もさることながら、国と国の間の方向も合わず、東とあるべきところが南、東北とあるべきところが東南となっているようにも解釈できる。まったく扱いに困る描写であり、我々日本人からすれば、唯一の情報源であるがゆえに非常に残念な行程描写であることは間違いない。

結局、その道里を計ると、ちょうど福建省会稽郡東冶県の遥か東に在ることになり、まともに考えれば、グアム島あたりになってしまうと説く研究者もいる。これら一字一句すべてを信用している人は皆無であろうが、どこまでの描写が信頼でき、どこからアバウトな情報に変化してしまうかを、上手く線引きする必要があり、研究者の論点もおのずとその部分に集中しているようだ。



魏志倭人伝(東夷伝)が著された意図

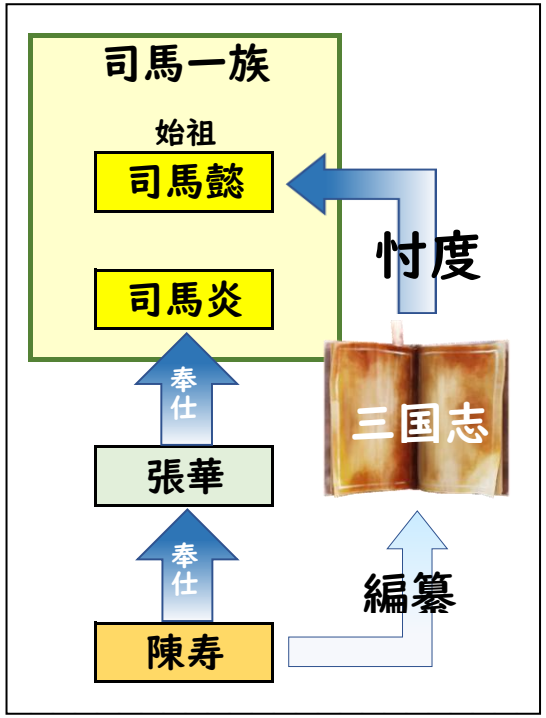
この倭人伝の記述から、「倭国とは、敵国呉の背後にある広大な国であり、対呉戦略上の重要な国である」ことを宣伝し、その存在意義を強調したいのだと言う。さらに距離についても、倭国の中心的な都市として描かれている邪馬台国までの全行程が、どうしても一万七千里でなければならない理由があるとも指摘する。前半部分は、魏にとってこれほど戦略的に重要な位置にある倭国連合の女王が朝貢してきたのだという事実を伝えることであり、後半は、その倭国とは西域の大月氏国と同様に一万数千里以上の遠方に存在する大国であることを改めて世間に知らしめることなのだ、と想定する事も出来る。

非常に興味をそそられる論説であると同時に、そう考えると、「会稽郡東冶県の東の海上」から導き出されるイメージが、なぜか「黥面文身」と重なり合うのもなかなか上手い仕込みであると思わざるを得ない（はるか南の海上にある国であれば、黥面の人々がいてもおかしくない、という当時の人々の一般的イメージが確かに存在していた）。

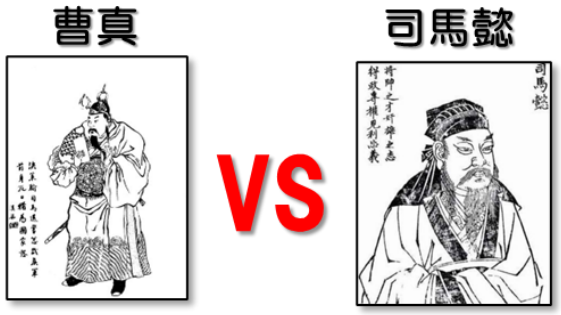
では、なぜ陳寿はこのような記述をしたのか？当時の日本列島に関する確かな情報をもとに著したのであろうか？逆に、詳細な情報がないため、仕方なく適当に書いたのであろうか？陳寿のおかれている立場から考えると、どうも情報がなかったとは思えない。パトロンの張華などはその軍事活動から、おそらく半島及び日本列島に対する詳しい情報を持っていたはずである。そこに陳寿の如何なる意図があったのか、まず『三国志』魏志の東夷伝の内容から検討してみる。

西域の大月氏国と比較された東夷伝の倭国

ところで、「魏書」には東夷伝があるのになぜ西戎伝がないのか。同時代の『典略』はしっかり「西戎伝」を立てているので、西域に関する情報が欠如していたとは思えない。したがって「魏書」にそれがないのは、はなはだ不審であり、構成上、ややアンバランスな出来と言わざるを得ない。やはりここにも陳寿の“忖度”が見え隠れしていると言ってもいい。
当時西域の代表的国家と言えば、やはり大月氏国であろう。魏は229年、大月氏王のヴァースデーヴァに「親魏大月氏王」の金印を与えているが、ヴァースデーヴァの使節を招き寄せたのは、例の曹真であり、その功績は大であった。さらに曹真のメンツを立てた結果、「親魏大月氏王」の称号を与えることとなったわけだ。一方で、ライバルであった司馬懿も負けるわけにはいかない。二三九年、司馬懿の演出により朝貢してきた倭王卑弥呼に同格の「親魏倭王」の金印・紫綬を与え、結果、対抗馬である曹真・曹爽に一矢を報いる形となった。ただその際、司馬家サイドである陳寿は、司馬懿の功績を称えるために朝貢の記述にとどまらず、倭国(邪馬台国)を大月氏国と同等かそれ以上の大国に作り上げねばならない使命をも感じていたのである。



魏の四代皇帝、曹髦(そうぼう)が司馬昭の専横を嫌って兵を挙げるも返り討ちになって戦死した事件
↓
王殺しの司馬昭は死罪ではなかった
曹髦に対する陳寿の記述は「崩」ではなく「卒」となっている



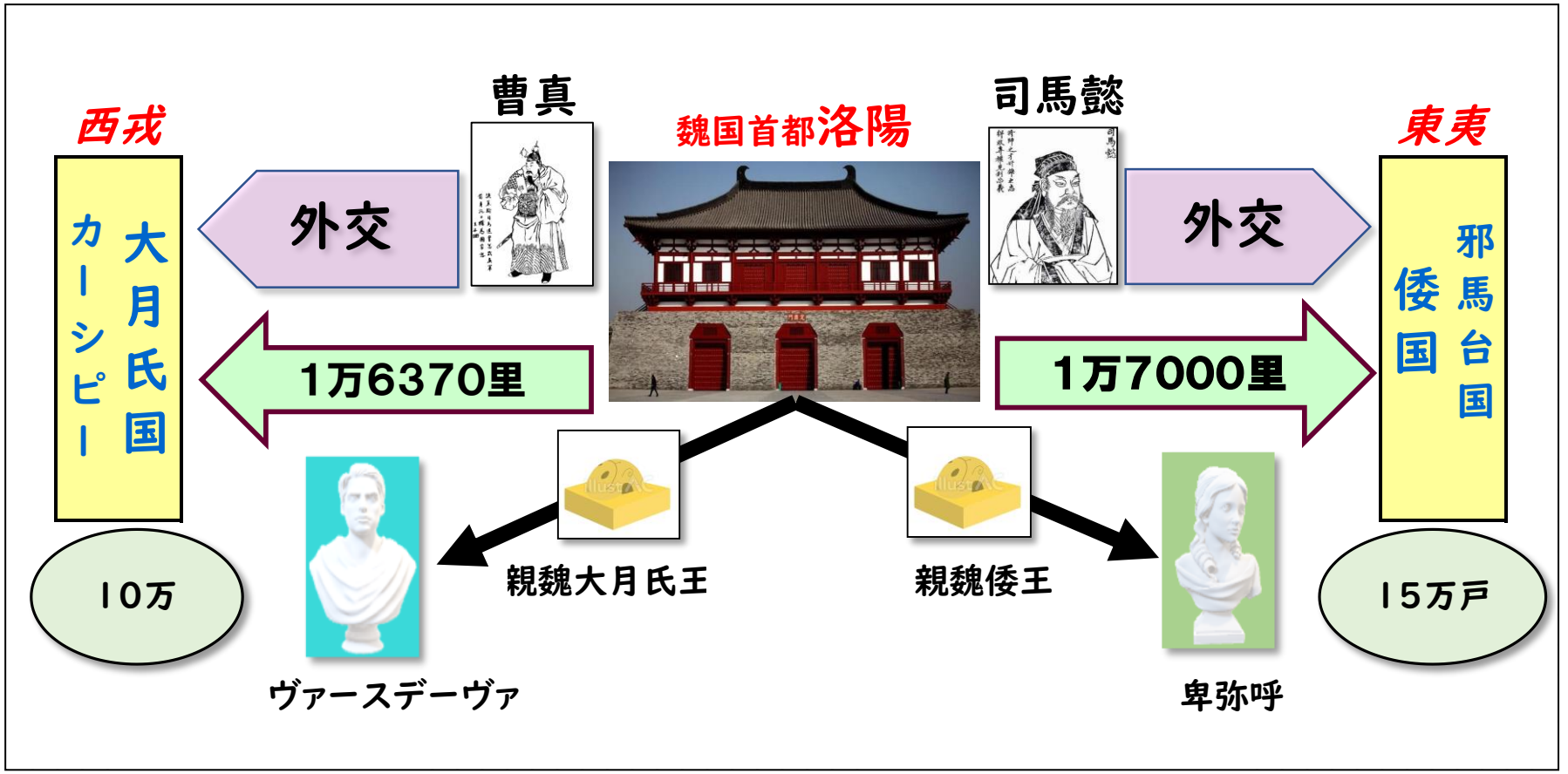
陳寿が仕えた司馬家と始祖司馬懿

司馬懿(仲達)は、当時の大将軍曹真とともに魏の二代皇帝曹叡の補佐役となり、蜀漢に対する戦線で指揮を執った。一方曹真について『三国志演義』とは相違して、本伝では部下思いの優秀な将として描かれている。配下の張郃が「泣いて馬謖を斬る」の馬謖を街亭に打ち破り、最終的には曹真の戦略が諸葛亮の第一次北伐計画を挫折させたと言っても過言ではない。このように多くの軍功があったことは事実なので多分本伝の方が真実に近い曹真を伝えていると思われる。したがって、対蜀戦においても前半は曹真の功績の方が目立ち、それに比べて司馬懿の方はそれほどでもなかった可能性がある。それよりも、後年の公孫淵討伐を完遂し、遼東の制圧に成功したことの方が司馬懿の最大の功績と言えるだろう。その後、曹真の子息曹爽の死を契機に、司馬懿は最終的に魏における全権を握ることとなるが、ほどなく死去してしまう。後に孫の司馬炎が魏より禅譲を受けて正式に皇帝となり、晋朝を起こすことになる。ところで司馬一族に仕えていた張華をパトロンにもつ陳寿が『三国志』を実際に執筆していた時期は、二六〇年代後半から二八〇年くらいと思われる。彼としては、魏の後半部分の国史を書く上で、どうしても曹真・曹爽親子と司馬懿の実績を比較しながら記述していた可能性は大いにある。その際、当然のごとく司馬懿の功績を華々しく誇張する必要に迫られていたことも想像に難くない。それは今はやりの“忖度”なのであろうか。いずれにしろ、当時成立していた晋王朝を正当化するためにも、少なくとも始祖の司馬懿のイメージをできるだけ名誉あるものにするよう忖度する必要は確かにあった。また、陳寿にとってはこれが唯一の身を守る術であったのかもしれない。したがって、倭国伝を含む「東夷伝」の描写は、そうのような陳寿の思考のもとに創作された可能性は高い。

陳寿が捏造したと思われる数値

『続漢書』には大月氏と洛陽の距離を「万六千三百七十里」としている記述がある。陳寿はその首都であるカーピシー城と倭国の中心邪馬台国が同じような「遠さ」になるよう捏造した。つまり帯方郡から邪馬台国まで一万二、三千里とし、洛陽から帯方郡までの五千里を加えるとちょうど一万七、八千里となり、釣り合いが取れる。さらに一万二千里とした意図はもうひとつあって、二三九年卑弥呼の朝貢盛儀の公報に「帯方郡より一万二千里」と明記されており、これが既成事実であったため、この里数は外すわけにはいかなかった。そうなると、今度は朝鮮半島の大きさも捏造せねばならず、帯方郡（現在のソウル）から東南端の狗邪韓国までを七千里としてしまい、結果、あまりにも巨大な半島が出来上がってしまった。ただ、そうしないと邪馬台国まではとても一万二千里にならないからである。

つまり、実際の距離はどうでもよくて、最初から一万七千里ありきの話であったわけだ。さらに、首都カーピシーには十万余戸の戸口があったとされる。陳寿は、その行程から順に対馬国、一支国、末慮国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国、邪馬台国を合わせて十五万余戸になると記すことで、十分首都カーピシーを含めた大月氏国全体に匹敵する戸口があったことを強調した。これも捏造と見なすべきか。因みに、その中でも邪馬台国の戸口は七千戸と記されるが、なんとこれは当時の洛陽の戸口と同等であると言われている。倭国の中心的都市である邪馬台国とは言え、さすがに大都市洛陽と同じ規模だったとは、俄かには信じられない。これも始めから七千戸ありきだったのかもしれない。こうしてみると、朝鮮半島も含め倭国（邪馬台国）に関わるすべての数値は、大月氏国と比較した結果、それらと同等の数値になるように捏造されたと見なされてもおかしくない。



“忖度”した陳寿の狙い

作者の陳寿は「烏丸・鮮卑・東夷伝」を著すうえにおいて、晋朝の礎を築いた司馬懿とその一族に対し“忖度”をして次のような狙いで編纂を進めたと推測できる。結果、非常に詳しい東夷伝が出来上がっている。

- 265年に始まる晋朝の帝室の権力の起源を説明するために、晋朝の事実上の創立者であった司馬懿を必要以上に持ち上げること。
- その反面、政敵であった曹真・曹爽親子(特に曹爽)の功績は必要以上に伝えないこと。
- 司馬懿の東夷征伐に対する輝かしい功績を盛り込むため、異常なまでに詳しい「東夷伝」をつくること。
- その中で特に、司馬懿の演出で朝貢してきた女王卑弥呼が治める邪馬台国を含めた倭国全体がいかに大国であるか をアピールし、その周辺についての記述も充実させること。
- 加えてその倭国を、当時の敵国である呉の背後に存在する大国であることを匂わせ、政治的にも非常に重要な国であ ることを強調すること。
- 政敵曹真の尽力により朝貢してきた西域の大月氏国の「遠さ」と「大きさ」を念頭に、司馬懿の関わった倭国(邪馬台国)も同等かそれ以上の国力になるようそれぞれの数値を捏造すること。
- 曹真と関係が深い大月氏国を含め、魏との交渉があって曹真の手柄になりそうな他の西域諸国を記す「西戎伝」はあえてつくらないこと。

西方世界を切り開いた張騫と大月氏国

紀元前2世紀、前漢では日々匈奴の侵入に悩まされていたため、遂に西方の月氏と共同で匈奴を討つべく、武帝の時代に張騫を使者とした使節団を西域に派遣した。張騫は匈奴に捕われるなどして10年以上かけ、西域の大宛(フェルガナ)・康居(こうこ)を経て、ようやく大月氏国にたどり着いた。この時の大月氏王はかつて匈奴に殺された先代王の王妃が君臨していた。いわゆる女王国であったのである。ひょっとして陳寿は『史記』『漢書』に記されている張騫伝のこの女王政権の記述を読んでおり、双方との対比を考えて、倭国にも女王卑弥呼がいたことを創造したのかもしれない。卑弥呼という名も「みめみこ」(王女?)という意味で、決して固有の名詞ではないのかもしれない。仮にそのような想定が許されるなら、陳寿の倭国伝のすべての記述を史実として抑えることはできなくなってしまう。

参考図書
岡田英弘『日本史の誕生』、『歴史とはなにか』